

「銀座デザインルール第二版」出版記念シンポジウム

世界の潮流からみた「銀座のルール」

2012年3月23日(金) 16時～18時 *15時半開場。受付開始

ウェンライトホール

中央区銀座 4-5-1 教文館ビル9F

銀座デザイン協議会は、2006年の設立以来、大規模開発を含む約600件の事例にあたりながら、銀座のまちづくり、銀座デザインの指針となるような考え方を模索してきました。

第二版出版の記念として、建築や都市計画の専門家の先生をお招きし、世界の潮流からみた「銀座デザインルール」のあり方と、銀座都市空間のさらなる可能性を探ります。

<主催>銀座街づくり会議

■講師■

- 蓑原 敬 (都市プランナー)
- 小林博人 (慶應義塾大学教授、小林・楨デザインワークショップ)
- 中島直人 (慶應義塾大学専任講師)
- ディマ・クリスティアン (東京大学先端科学技術センター 特任研究員)
- 窪田亜矢 (東京大学大学院准教授)
- 竹沢えり子 (銀座街づくり会議 企画運営担当)



竹沢 時間となりましたので、『銀座ルール』第二版出版記念シンポジウム「世界の潮流から見た『銀座のルール』」を開催させていただきます。私は銀座街づくり会議で企画運営を担当しています竹沢と申します。よろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムをご案内しましたところ、定員90名のところあっという間にいっぱいになってしまい、教文館さんをお願いしてこちらも開けていただき、すべての椅子を出していただいたうえで、銀座通り連合会から椅子を運んできてこのような形になりました。たくさんの皆さんに来ていただき、本当にありがとうございます。申し込みをお断りせざるを得なかった方もいらっしゃいまして、この場を借りてお詫び申し上げたいと思います。また、皆さんにもご不便をおかけするかもしれません。こちら側の方には見えにくいところもあるかもしれませんが、椅子をずらすなどしていただければと思います。

非常にかたいテーマだと思うのですが、それにもかかわらずこのように皆さんにご関心をもっといただき感謝申し上げます。

開会にあたり、銀座街づくり会議協議会議長、銀座通連合会理事長、全銀座会代表幹事であります小坂俊幸より開会のご挨拶をさせていただきます。

小坂 みなさん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました銀座デザイン協議会の小坂と申します。本日は「銀座デザインルール第二版出版記念シンポジウム」を開催しましたところ、たいへんお足元の悪いなか、多くの方にお越しいただき大変ありがたく思っております。

ご承知のように、銀座におきましては2006年に銀座デザイン協議会を設立し、2008年に銀座デザインルールの第一版を出版しましたが、これをより時代にマッチしたものにすべく、このたび第二版を出版いたしました。これまでも銀座に新しく建つ建物や広告物に関して600件以上にわたり事前協議をしまいましたが、この改訂版がさらに事業者の皆様、本日お集まりの皆様方にとりましても参考になるものになってもらえればと願う所です。

本日はこの銀座デザインルール第二版の内容の説明に続き、ディマ・クリスティアン先生からのご講演をいただき、そのあとパネルディスカッションを行うという、大変盛りだくさんの内容になっております。世界の中から見た銀座、また世界の街づくりの中から見た銀座の街づくりについて、いろいろ皆様のご参考になるお話をお聞かせいただけるものと、私も楽しみにしているところです。最後までよろしくご清聴賜りますようお願いしまして、誠に簡単ではございますが開会のご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

竹沢 では早速プログラムに入らせていただきます。今日は3部構成で進みます。最初に出版の報告ということで、銀座街づくり会議設立以来アドバイザーとして日ごろからご助言いただいている先生

< 出版の報告 >

「事例の積み重ねによるデザイン協議 — 600件の実績をふまえて」

小林博人 (慶應義塾大学教授)
蓑原 敬 (都市プランナー)
中島直人 (慶應義塾大学専任講師)

方にご登壇いただきます。都市プランナーであり蓑原都市計画事務所の蓑原敬さん、建築家で慶應義塾大学教授の小林博人さん、慶應義塾大学専任講師で都市計画がご専門の中島直人さんです。

小林 みなさま、こんにちは。今日は本当にたくさんの方にお集まりいただきまして、銀座のデザインルールについて、みなさま方とお話し合いやいろいろな議論ができればいいなと思っております。私共は時間を使いながらルールを決めてまいりましたが、皆さんに読んでいただきご批判をいただき、そしてまたよいルールにかわっていくと思っておりますので、これがよい機会になればと思います。

まず第二版の説明を私、蓑原さん、中島さんからさせていただきます。今日はぜひみなさま方といういろいろな議論をするために、「先生」というのはやめて、みなさん「さん」づけにさせていただきますので、よろしくお願いします。

この銀座デザインルール第二版は、2008年2月に第一版ができました。2006年に地区計画の見直しがあり、それを受けて私共の中で銀座ではどうすることが自分たちの決めごととしてあるのか話し合いを続け、それを一冊にまとめたのが銀座デザインルールです。しかし、こういうものは印刷して形になった途端、そこでルールが固着する、固定化する危険性をはらんでいます。銀座デザインルールの最大の特徴は、みんなで協議して話し合いの中で物決めをしていく点ですので、いわばこのデザインルールをつくってしまうとそれと相反することをやってしまうという矛盾をはらんでいます。したがって、できるだけこのデザインルールを皆さんに読んでいただき、いろいろな解釈ができて銀座のことを理解していただきながらも、これにあまりとらわれることなく、自由に発想していただきながら、変革・改革のできる銀座という伝統を守っていただこうというのが趣旨です。

実は、第一版ができてからすぐ第二版を出そう、第三版を出そうと考えていたのですが、ぱっと4年が過ぎてしまい、これは私共の不徳のいたすところです。自分の首を絞めることになるのですが、第三版がすぐ出ることを望んでいます。

デザインルールの根幹にあるのは協議型、話し合いに基づいて行われるということです。しかし、地区計画や駐車場ルールといった行政で決められた法制度に則った決まりが一方にあります。そういういわばかたい、きちんとした法制度と、銀座の中でやわらかい話し合いによって決められるやわらかいルール、この2つが相まってこの銀座デザインルールはできています。

そして、銀座では今まで600件を超える案件を話し合いで協議しながら、2006年から現在に至るまで、銀座のデザイン協議を進めてきました。その中でだんだん事例を積み重ねるにしたがって、そういうことを通して皆様方がこのルールに合意をしていくという過程が生まれました。私共はこれは進化だと思っていまして、事例ができればできるほど皆さんにわかっていただけになります。

したがって、今回の第二版ではできるだけたくさんの事例を見ていただきながら、こういった問題はこういうふうには回答を出したのだ、こういうふうには解決したのだということを、実際の写真やエピソード



ソードをまじえて説明することによって、皆様方にわかっていただくという方法をとりました。したがってたくさん写真があります。その写真を見ていただくと、なるほどこういうことを銀座は気にしているのだな、こういうことを皆様方と協議をして決めたのだなということがわかっていただけると思います。

具体的には、銀座は江戸時代以来、通りの特徴というのがあります。表通り、裏通り、路地、こういう通りごとの特徴が空間的にあります。それが今でも引き継がれています。その通りごとに、実はルールが少しずつ違うということをご理解いただけるように構成しました。その空間がどういうものが望ましいのか、いろいろな観点から書いています。それを見ていただきながら、こういう通りではこういうことに気をつけなくてはいけないのだということを、一つ一つ紐解きながら読んでいただくということです。

この後、中島さんから通りごとにどのような特徴があったのか、事例をまじえてお話をいただき、その後総括として蓑原さんからこれからの銀座デザインルールはどうあるべきか、お話ししていただきます。では中島さんお願いします。

中島 小林さんのご説明を補足する形になりますが、通りごとに特性があるということですが、実際にデザイン協議をする中でやはり銀座らしさがポイントなのですが、たとえばここは数寄屋橋の交差点に面しているからこうだとか、この通りだからこうだとか、銀座の中でも重視すべきところが場所によって違うという、「場所性」のようなものがあります。そういう点は、第一版から銀座通りはこれだ、並木通りはこれだという形で書いてあったのですが、そこを充実させたことが第二版の大きなポイントのひとつになります。

特に第二版では、たとえば西銀座通り、数寄屋橋の交差点のあるところは、東急さん、現在阪急が入っている建物がこれから建て替わりますので、そういうところは今までルールで特に触れられていなかったのですが、西銀座通りというかたちで少し他の通りと違って非常にスケールが大きいのです。行ってみるとわかりますが、幅員が大きく、建物もすでに31メートルを超えている建物が並んでいます。そういうところでどのような街並みの特徴があるのかということを追加検出したりしています。

今まであまり銀座というところでは触れられていなかった通りや、銀座通りと昭和通りの間などを補足したのが大きな改訂の内容です。それと同時に、すでに第一版から書いてあった西並木通りさんやみゆき通りさん、あづま通りさんといった通り会の方から、もう少し内容を充実させたい、我々が考えていることがもっとあるから書き加えたいということで、もともとあったものをさらに充実させた部分があります。そういう意味でいいますと、事例や協議の積み重ねで中身が充実したのと同時に、街の方々の通りごとのボトムアップといえますか、そういうところからもルール作りが更新されているという内容になっています。



具体的な内容に関してはディスカッションのなかで出てくると思いますので、主に2点、今まであまり触れられていなかったところを取り上げたということと、今まで取り上げられていたところが地域の方々のボトムアップで更新されたのがポイントかと思います。

養原 銀座ルールというのは、世界的にも珍しいルールだと思います。非常にかたい都市計画のルールがあると同時に、その一方では非常にやわらかい協議型でかっちりルールを決めない、こういうアマルガムで街をきちっとしていこうという、非常に難しいというか、珍しいシステムが実際に数年間稼動しているわけです。それを何が支えているかという、第一に何よりも銀座の人たちが一丸となって、そういうことをやるのだという意志をくずさずに守ってきたことが非常に大きな要素です。それに対して外部から来た資本や外部の人たちも銀座に対して敬意を払って、そういうルールに従っていこうという気持ちをずっと示していただけてきました。この歴史が第一版の歴史でして、その積み重ねで今日まで至ったわけです。

600件にわたるいろいろな審査をしながら、街がきれいになってきています。第二版を契機にして、これから第2段ロケットに入っていくわけですが、いま申し上げたように非常に珍しいルールのシステムで、下手をすると脆弱、もろいという感じもありますし、これをどのように展開していったらよいか。それから、いま中身についてよりも形をいろいろ議論しているのですが、実は中身についての議論のほうが大きな問題になるということもたくさんあります。特に三越さんの再生によって形が変わったのですが、これから松坂屋さん、歌舞伎座さん、西銀座のいま東急さんがお持ちになっているところの再開発などが始まりますと、中身についての議論も非常に大きな問題になってくると思います。

次の第三版にかけては、そういった経験を踏まえて、さらに我々が新しい展開をしていくスプリングボードとして第二版ができました。少なくとも皆さん方のお力添えでかなり安定した形で第三版に向かって進んでいますので、これからもそういうかたちでご協力を願って、銀座がよくなっていけばと思います。今日のシンポジウムは、銀座の珍しいルールを国際的な立場から見たらどのように見えるのか、かなり幅広い議論ができるのではないかと楽しみにしています。

小林 お手元にお配りできなくて残念なのですが、お帰りにぜひ1冊ずつお求めいただければと思います。今日は特別価格になっております。

竹沢 では次に「誰もが参加できる街づくり—世界の事例」と題して、ディマ・クリスティアンさんにご講演をお願いしたいと思います。クリスティアンさんはドイツのご出身で、東京大学で博士号を取得され、現在は東京大学先端科学技術研究センターの特任研究員でいらっしゃいます。早稲田大学



でも教えていらっやって、持続可能な都市、都市計画、公共空間などの研究をなさっています。日本には10年以上滞在されていて、今日は国際的な視点から銀座の街や銀座ルールを見ていただいたらどのように見えるのかということで、ご講演をお願いいたしました。ではよろしくお願いします。

<講演>

「誰もが参加できるまちづくり：世界の事例」

ディマ・クリスティアン

(東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員)

ディマ お越しいただいた皆様、今日は新しい銀座ルールについて、都市と公共空間に関する私の見解を述べさせていただくことを光栄に思います。これは私が初めて日本語で行うプレゼンテーションなので、バラバラになってしまうかもしれませんが(笑)、よろしくお願いします。

今は買い物や仕事が公共生活のほとんどを占めています。そのため日本ではショッピング施設が大きな割合を占めてきました。より大きな世界の潮流のなか、これから行う銀座についての討論の背景として、いちばん重要である小売店の形態の変化から話を始めたいと思います。

これは皆さんご存知の、大きな箱型のショッピング施設です。外側は公共空間ですが、あまりよい雰囲気は出てこなくて感心できません。【2】

これはこの間できた川崎のラゾーナ・モールです。新しい方法でよく見えるようになっていきます。箱型建築物のなかに公共空間のような場所があります。生活空間をシミュレーションして、外側は大きな駐車場や、店や窓が入っていない何もないファサードがよく見られようになっています。【3】

これも同じようなもので、亀戸のサン・ストリート。中には古いヨーロッパ都市のような広場が入っていて、にぎわいができています。外はオーセンティックな都市の中にはなにもありません。【4】

次は、京都のリチャードロジャースが設計した新風館という場所です。歴史的な建物の中に市場やスクエアができて、外側には何もありません。言いたいことは、もちろん現代都市の中には大きなショッピング施設は絶対必要ですが、周りの都市は中間領域を作らなくてははいけません。周りにもう少しやさしい面を見せてほしいです。【5】

新しくできた銀座ルールでも重要なことで、ヒューマンスケールのレベルで1階、2階のファサードを開いています。他の都市もそういう新しいショッピング施設のパターンができています。

たとえば、表参道、丸の内の中通りでは、店は公共空間沿いに並んでいて、木がよく植えられていてベンチやパブリック・ファニチャーも入っています。【6】銀座ではまだあまり見られていません。公共空間のなかで座って、人を見て都市の悲劇を見て(笑)・・・。

国際的な2つの事例をお見せします。これはベルリンのカウフホフです。古い箱型の大きなショッピング施設です。ファサードには窓は入っていないで、あまりやさしいスペースにはなっていません。【7】

新しい事例はドレスデンのフラウンエン教会の周りにできたものです。これは個別な建物ではなくて、大規模なショッピング施設はファサードの裏に入っていて、1つのマネジメントがこの施設を管理しています。街みたいですが、実は大規模なショッピング・モールが街に溶け込んでいるのです。【8】

第2の事例はドイツのブラウンシュヴァイク市です。これも歴史的な建物のように見えますが、実は5年前にできたものです。第二次世界大戦まではこの城が街の中にあつたのですが、消失して戦後50年くらい何もなかったのですが、最近ビルをよみがえらせました。この中に王様は住んでいませんが、大きなショッピング・モールが入っています。もちろん、古い都市をコピーするのはあまりよくない



のですが、結果は大きいショッピング・モールを作っても、ファサードの奥に透明なガラス張りを作っ
て少しやさしくして、周りの都市によく溶け込んでいます。【9】

これは新宿の伊勢丹です。【10】

次に、街の競争と統一的な都市デザインには強い関係があります。街同士に競争があって、場所作
りが重要なことになっています。たとえば日本橋のルネッサンスでは日本橋を再生し、川沿いのきれ
いなプロムナードをつくる計画があります。大丸有では大規模再開発の建物は公開空地を川沿いに配
置して、一体的な水辺の空間が作られます。【11】

銀座は残念ながら、水は残っていませんが、街同士の競争力を高めるためには自分のポテンシャル
を活用しなくてはなりません。銀座のポテンシャルは、大通りがあり、裏道があって、路地のような
人間的な空間、本当に面白くてやさしいスペースがあることです。そういうポテンシャルをもう少し
積極的に活用しなくてはなりません。もちろん、街同士の競争だけではなく、国際的な都市の競争も
ありますから、東京全体としていろいろな街づくり活動をインテグレートしなくてはなりません。【12】

クリエイティブ階層、文化メディアのソフト面の要素が重要になります。リチャード・フロリダとか、
いろいろな人がソフトの側面を強めなくてはいけないという研究を出しています。生活の質を重要視
して、人間のスケールから考えなくてはなりません。【13】

これは冗談ですが、「東京グリーン・アイランド・プロジェクト」というアーティストたちが東京の
いろいろな場所にフォトショップで芝生を入れて、もう少しやさしい都市に作ろうというアイデアで
す。いろいろなクリエイティブな若い人が、新しいアイデアを議論しながら進めています。【14】

また、ドイツに戻ります。ドイツやヨーロッパは、都市の競争力を強めるためにいろいろな総合的
な公共空間プログラム、コンセプト、戦略を最近よくつくっています。たとえば、ハノーバ市は「都
市空間と生活」というマスタープランをつくり、ミュンヘン市ではインナーシティのコンセプトの中
にも公共空間を入れていて、全体的なコンセプトが重要です。スイスのチューリッヒ市の公共空間の
戦略は2006年にできました。ばらばらな開発だけではなく、エリアとして、街全体として考えなく
てはいけません。【15】

こうしたコンセプトは行政が直接つくるものではありません。銀座と同じように、公共的なフォーラ
ムで一般市民と専門家と一緒にオープンなプロセスで新しいソフト面のルールをつくってきました。
この事例も銀座と近いと思います。

ドイツのケルン市では、地域企業によるマスタープランが始まりました。ケルン市の開発はばらば
らだったので、街全体のマスタープランが必要になり、ドイツで最も有名な都市プランナーであるア
イザックペアにマスタープランを委託して、ケルン市はオブザーバーとして参加しました。重要なこ
とは、専門家と一般市民がオープン・フォーラムで1年間かけてマスタープランをつくったことです。
それをつくった後も、毎年公共的なフォーラムがあってマスタープランが固くならないようにオーブ



んなプロセスを実施しています。【16】マスタープランの中の公共空間のコンセプトでは、広域的な広いコンセプトをつくって、その中に具体的なアイデアも入っています。【17】

最後の事例は一番新しいドイツのブレーメン市のノイヤス・フルスベルグ地区です。ここは市立の病院で14ヘクタールです。必要なのはこの部分だけで残りは再開発の可能性があります。再開発は2014年から始まります。これからこの地域に住みたい人が自分たちでプランをつくっています。専門家はプランもスタディも全然やっていなくて、市民が最初です。新しいガバナンスのアプローチです。【18】

日本に戻って、総合的な公共空間の戦略、都市デザインの戦略は70年代の横浜にもありました。全体的な都市ビジョンをつくり、人間のスケールから生活の質を考えたコンセプトがありました。【19】

なにがこれから重要になるかという、第一は変わりゆく時代に対応する戦略です。隣のビルがなくなって空き地をどうしようというときに、コインパーキングになれば、それによってお金にはなりますが、やはりそういう空間を積極的に戦略的に使ったほうがいいと思います。銀座では2年前に水田をつくりました。でももう少し戦略的な取り組みを考えたほうがいいと思います。【20】

オープンスペースだけではなく、ビルの建物に関しても、時間と空間との一体的なマネジメントも重要です。たとえば幼稚園は月曜から金曜まで使い、オフィススペースは週末にはあまり使われていない。ショップやワークショップは週末にはあまり使われていない。では使われていない時間帯はどうしたら使えるようになるのか。

建替え予定のビルがあった場合、建替えの半年前くらいは家賃を低くしてクリエイティブな人やアーティストが借りられるようにしたらどうでしょう。【21】

すべての人に対するスペースをつくり、変わりゆくニーズを認識することです。大人だけではなく、高齢者や子どもや若い家族にやさしい都市をつくりたいと思います。【22】

まとめますと、人間的なスケールに基づく計画ということで、これは大丸有のガイドラインから取りました。1階と2階は重要な中間領域になり、公的な空間と合わせて、にぎわいがあり、メリハリのある公共空間から計画を考えたいです。【23】

あとは、全体的な公的空間網から考えるということです。先程、日本橋と大手町の新しい水辺空間を見せました。銀座は路地を再発見しようとしています。今はあまりよい経験になっていません。【24】

オーストラリアのメルボルン市には、銀座のような路地空間が昔からありますが、大きな再開発が土地を集約して伝統的な路地空間が段々なくなっています。でも、4～5年前に全体的なビジョンをつくり、デンマークの有名な都市計画コンサルタントのヤングという人が戦略を立てました。メルボルン市側も再開発局長と一緒にビジョンをつくりました。1994年には新しくできた店、レストラン、ギャラリー用スペースは300メートルだったのが、10年後は3.4キロメートルになったのです。ま



ず戦略があって1歩ずつ路地のネットワークが延長されたのです。【26】

以上です。ありがとうございます。

竹沢 どうもありがとうございました。銀座の街は本当にいろいろと議論を積み重ねながらやってきたという自負はあるのですが、それを戦略的に考えるということが重要なのだと考えさせられました。

次にパネルディスカッション「国際的な視野から語る銀座のデザインルールと街の将来」に移ります。ディスカッションにご参加いただく先生をご紹介します。窪田亜矢さんは東京大学大学院都市工学専攻の准教授です。著書に『限界が活きるニューヨークのまちづくり』、共著として『景観まちづくり最前線』などをお書きになっています。そしてただ今ご講演いただきましたディマ・クリスティアンです。ディスカッションには私も登壇することになりましたので、ここでマイクを小林さんにお渡しして司会をお願いいたします。

小林 いま、クリスティアンさんにご講義いただいて、世界の、特にドイツでいろいろな形でショッピング・モールができていく。通りに対して非常に閉鎖的であるところが、これから街に対してどういうふうに開いていくのか。公共のスペースはどのように使われるのか、そういうようなお話をいただきました。これから皆様と議論をしますが、最初に窪田さんからお話をいただき、それをきっかけにして議論を進めたいと思います。

＜パネルディスカッション＞ 「国際的な視野から語る

銀座のデザインルールと街の将来」

ディマ・クリスティアン

窪田 亜矢（東京大学大学院准教授）

竹沢えり子（銀座街づくり会議 企画運営担当）

コーディネーター：小林 博人

窪田 こんにちは。この場にお招きいただき本当に光栄に思っております。準備をしているうちにスライドの量が増えてしまったのですが、最初の話は短くということでしたので、いくつか飛ばしながらお話しさせていただきたいと思います。

世界の潮流から見た銀座のルールという今日のシンポジウムに、どういってお話がふさわしいか私なりに考えてみました。その結果、銀座と言った時に私が思い描くのは、「都市の文化」というキーワードです。銀座の文化が何であるかという議論をしてもあまり意味がないと思うのですが、銀座には確実に都市の文化なるものがある、それが日々きちんとどんどん醸成されていく。そういったアクティブな状況をキープすることが、たぶん銀座の生命線だと思います。そういったときに、同じようなテーマで世界でどうい議論があるかという、歴史的都市景観、英語で言うとヒストリック・アーバン・ランドスケープという言葉で議論されているところがあります。最初に少しでもこの概念を紹介させていただきます。私は10年ほど前にニューヨークの研究をしてまいりました。その時に、冒頭で蓑原さんがおっしゃった都市計画とソフトな形での協議が2本立てであるという状態がニューヨーク市にはありました。そのことを少しご紹介させていただきたいと思います。

世界で言えば、ユネスコが中心になって都市の関係、人間がつくってきた環境の何を次につなげていくかということ議論しています。日本でも景観法や歴史まちづくり法などの法制度が整ってききましたが、世界で見ても2011年にヒストリック・アーバン・ランドスケープというものが定義付けられて正式な議論になっています。【5】

これはどういうことかと言うと、これまではどうしても文化財というくくりで世界は考えてきました。そうするとモノを凍結的に保存することがもっとも偉くて、新しく作り続けることが軽く見られる傾向がありました。それがいろいろな議論の中で、だんだんもっと作り続ける状態、あるいはそこで人間がいきいきと活動している状態、そこに価値を置こうという方向にシフトしています。

そうは言っても、たとえば高層タワーに象徴されるような現代建築物と、歴史的な環境といったものが調和した形であるかという、なかなかさうとも言えない。しかし何が悪くて何がよいのかといったことは、個別に議論していかないと、一般論では語れないところがあります。ですから、ユネスコの議論を見ても、単純には言えないことなのです。こうしたヒストリック・アーバン・ランドスケープという世界中で議論していることを、銀座の街にうまく貢献していただけないか。銀座の街がある種のヒストリック・アーバン・ランドスケープの作り方、創造の仕方はこうなのだとということを見せていただくということが、私が外部から期待していることです。

では、ニューヨークについてお話しします。ニューヨークでは、高層タワーがたくさん建っているという印象があるかと思いますが、旅行されるとよく分かると思いますが、3階建てから5階建てくらいのヒューマン・スケールの集合住宅、都市型の住宅が並んでいます。彼らはそれをどうやって継



承しているかということ、ある種の条例、仕組みがあります。今日はその仕組みの詳細は省きますが、ニューヨーク市も重要な主催者となってその仕組みを運用しています。

重要なことは、そういう仕組み、ヒストリック・ディストリクト、歴史的地区と言いますが、この仕組みに乗っかるためにはその界限は2つの条件を満たさなくてはなりません。1つはスペシャル・キャラクターがあるということです。スペシャル・キャラクターとは何かと言ったら、特別な性格というだけで何でも特別な性格になってしまいますから、どんな界限でもヒストリック・ディストリクトになれるということです。

もう一つは、ニューヨーク市の歴史において重要な役割を果たしているかどうかということです。私が銀座の取り組みを勉強させていただく中で、非常に似ていると思うところは、地区が継承しなくてはならないことを創造に使う。新しく作るためにそれまでの蓄積を使うという点です。違うところは、東京都がかんでいないということです。ニューヨークの場合は市がかんでいるのですが、銀座の場合は銀座の皆さんがボトムアップ型でなされているということです。それはとても面白いことだと思いますが、ややもすると、先程クリスティアンさんもおっしゃっていましたが、東京都全体で見てどうなのだから、そこにもっと可能性があるのではないかということを感じています。

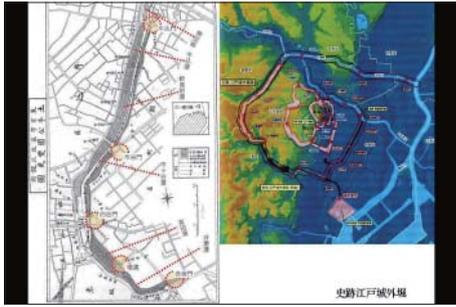
事例としては、これはニューヨークの5番街ですが、ヨーロッパの建築がアメリカに来たとき、こういうものが美しいということで作られました。【7】そういった流れの中で、ここに注目してほしいのです。この建物は新しく作ったものです。【8】これはまさに、銀座ルール第二版の中でさまざまな取り組みがなされていると思いますが、こういう事例です。たとえば、建物の軒線が合っているとか、素材が大理石で一緒であるとか、そういうことをしながら1個1個丁寧に、ニューヨーク市でも建物をマネジメントしているという仕組みが実はあるのです。

フィリップ・ジョンソンという非常に有名な建築家ですが、世界的に有名な建築家でも地域の文脈をどう読むか、そこで地域の住民の方々と対話をしています。そういうシステムをニューヨーク市はちゃんとやっています。【9、10】

グリニッジ・ビレッジの名前は皆さんも聞いたことがあると思います。【11】この界限に新しい建物を建てるときに、人が住んでもいるし、お店もあるし、日本語で言えば下町という部分を建物にどのように反映できるかということ、立面のデザインを含めて審査しています。結構めんどくさいことを市がやっています。【12】

銀座では銀座の皆さんがやっていらっしゃるということが、似ていると思います。こういう街に新しい建物を建てるときに、何がふさわしいのかということも議論しています。

私自身が関わらせていただいている東京の事例として、たとえば神楽坂でも銀座の皆さんと同じように地域の皆さんが一生懸命神楽坂らしさとは何かということも議論して街づくりをされています。これは外堀です。【14】先程、銀座の外堀がなくなってしまったという話もありましたが、今生きてい



る外堀、これは文化財保護法のもとで史跡になっているところですが、その史跡の周辺に、こうしてポータに乗ったり【15】、いろいろ歴史が積み重なっています。こういうところで歴史的な景観とは何かと、外堀があって電車が通っているのを見て、千代田区側が高く新宿区側が低いというのは当然なのです。外堀で江戸城を守っているわけですから。【16】 こういう風景の意味といったものは、歴史性を知らないとわからないわけです。こういうことがわかってくると、どんどん東京都の魅力が全面に出てくるのではないかと思います。であれば、法政大学のこの建物がここにふさわしいかという議論が、新宿区さんと千代田区さんと港区さんの中で出てきています。【17】

最後に、文化といったときに、一步間違えると、何かそれは豊かだからできるよねというようなことを言われがちだと思います。私はこのかん大樋町【18】に通わせていただいているのですが、ここは湧水で有名な所で、湧水が下から湧き出てくる、自噴する所にコップがちょっと置いてあったりするわけです。【19】これは昔からの自噴があるならではの風景、みんなで水を使っていたという共有の風景の原始の部分のようなものが、やはりここまで痛みつけられたなかでも出てくるのは、あるいは畑の風景であったり、これはまぎれもなく生活の文化がここから生まれているということだと思います。【20】

銀座で都市の文化といったときに、たとえば銀座がひどいことになったことを想像したときに、どこから銀座が再興、復興していくのかというぎりぎりのところで銀座の文化ということが重要なのではないかと感じています。

小林 ありがとうございます。ニューヨークの事例や神楽坂の事例などのお話がありました。時間の流れの中でどういった文化を守っていくのか、そういうお話だったと思います。

私は先程説明を省きましたが、現在の銀座にはまだまだ課題があります。銀座が解かなくてはならない課題が大小あります。これまで司会をやっていただいた竹沢さんにその辺のお話を少しいただき、参考にさせていただき、それから議論をスタートさせたいと思います。

竹沢 銀座街づくり会議の竹沢です。銀座デザイン協議会の事務局をしております、これまでご申請いただいた600数十件の案件すべてに目を通してまいりました。多くの事業者様と直接話し合ったり、ここはこうしてほしいという要望を出したりする中で、単に一つの建物への要望ですとか、デザインをこうしてほしいということだけではなく、やはり街の課題が見えてきていると感じています。この度デザインルール第二版を出しまして、第二版では事例を増やしたと同時に、銀座という街の課題に踏み込んで述べているということが特徴になっています。

私は現場におりますので、このパネルディスカッションのタイトルの後半の「街の将来」ということに力点を置きつつ、現場の小さなことから出発して、それにたいして私たちがこのデザインルール



を使って何をしようとしているのか、それについて話したいと思います。

現場では毎日さまざまなこまごまとしたことが起こります。いまとても困っていることの一つとして、非常に卑近なのですが、自転車の問題を取り上げたいと思います。皆さんもお気づきだと思いますが、いま銀座のいたる所に自転車が駐輪されています。【2】この数年で急速に増えて、銀座通りにまで放置されているような状態になっています。以前数えましたら銀座地区で3000台を超える自転車が駐輪されていました。

一昨年三越さんが地下に公共駐輪場を作ってくださいましたが、これだけ自転車が路上に放置されている中で同じ時刻に駐輪場はガラガラという残念な状態が起きています。【3】このような状態は景観上よろしくないですし、非常に歩きにくい。また歩道を走ったり、右側を走って向こうからバーツと来るようなマナーの悪い方も多くて危険です。銀座はもっとおしゃれをして来るところだとか、そういう声もあるかもしれないのですが、そういうことではなくて、自転車問題は銀座の都市デザインにかかわる大きな視点を含んでいるのではないかと思います。

一つは、環境への取り組みとしての自転車への積極的支援に銀座がどうかかわるか。特に震災後自転車通勤の人が増えたと言われていました。自転車の増加というのは、環境問題、エネルギー問題に対する時代の要請でもあり流れだと思えます。健康にもよいですし、それ自体はよいことだと思います。また災害への備えという視点も入ってくると思えます。だとすると、もっと積極的にとらえて銀座が自転車にとって走りやすいインフラづくりであったり、歩行者と自転車がうまく共存できる街づくりに取り組むこと、そして銀座は自転車がおしゃれだよねと言われるような、環境と健康を銀座の味方につけるくらいの街づくりやイメージづくりができればいいのではないかと思います。

少し視点がずれますが、実は歩行者と自転車が共存するには、公共のマナーづくりが必要です。銀座というのは、新しいお店が入ってくることに對しては非常に寛容な街です。ですので、どういう方にでもいらしていただきたい、しかしそこで銀座らしいマナーを守っていただきたいということも、銀座の街づくりを考える上で非常に重要なので、そういうこともここから考えられるのではないかと思います。

二つめに交通問題という視点があります。都市の交通については、ヨーロッパなどでは中心市街地には車は入れないという動きが出てきています。歩いて楽しめる通り空間を魅力的につくることが街の活性化につながるからです。そのために、LRTなどの公共交通を充実させています。これも大きな世界の潮流だと思いますが、そもそも銀座には「銀ブラ」という言葉があるように、歩いて楽しい街なわけです。それが銀座の特徴であり魅力だとすれば、私はいよいよ銀座の本領発揮だと思わうわけです。

これは、銀座の道路空間の地図ですが、銀座の面積の約4割近くが道路の空間です。まさに通り空間は公共の空間です。それが4割近くあるという本質を皆様にもう一度認識していただきたいと思



ます。そしてこの通りに商店がびっしり並んでいるというのが銀座なわけです。【5】

これは平成11年の少し古い資料なのですが、銀座へは約7割の人が公共交通で来ているというデータであります。このデータでは自転車は0.9%なのですが、たぶん現在は相当増えているのではないかと予測されます。【6】

これは2014年度に完成予定の環状2号線の地図です。【7】いま虎ノ門あたりで工事をしていますが、これが開通すれば現状の晴海通りの通過交通は大幅に減るであろうと予測されています。そうなった時に、現状の駐車場の必要台数、それから荷捌きや身障者用スペースの付置義務制度をどのように考えたらよいかということも問題になってくるかと思えます。つまり車中心からますます歩行者中心の街づくりに向かっているということになります。こういった銀座の交通戦略の中で、地下鉄、JR、バス、タクシーに次ぐ——、もしかしたら次ぐというよりももっと増えた足としての自転車を考えていかなければならないのではないかとということがわかってきます。

3番目に、ではなぜこのところ急速に自転車駐輪が問題になっているかという話です。それは自転車の台数が明らかに増えているからなのです。ではなぜ自転車の台数が増えたか。それは銀座の周辺に住民が増えたからなのです。中央区さんが力を入れて人口政策を行った結果、月島や晴海に大幅に住民が増えました。その方たちが通勤や日常生活の買い物を銀座でなさっている状況が出てきています。これは銀座の消費の構造が変わることを意味しています。もともとは銀座でも1階にお店があり2階に家族がお住まいになっていたわけです。それが高度経済成長とともにどんどんとビル化して、郊外へ住居を移していきました。昔から銀座は商業の街であったことは確かですが、かつては住むこととセットになった商売の街だったのです。それが、いまはそこから住むという要素が抜けているわけです。銀座で生まれ育った方は、おそらく今の団塊の世代の方が最後なのではないかと思えます。その方たちも結婚して郊外に住んで子どもは郊外で育てることが多いようです。しかし、少子高齢化社会を迎えて再び都市に人口が戻ってきています。銀座でもビルの上に戻ってきて住み始めた方が実際にいらっしゃいます。以前と違って会社の経費で接待をしたりお買い物をしたりという時代は変わってきたと思いますし、銀座周辺や銀座に住民が増えていけば、企業のお金だけではなく個人のお金が動くという街が変わっていくかもしれないということが考えられます。

もう一つ、現在銀座には、高度利用地区と街並み誘導型地区計画（オレンジの部分）と、用途別容積型地区計画（ブルーの部分）という地区計画がかかっています。【4】これは建物の高さや容積率を定めたものですが、これをとても簡単に説明すると、このオレンジの地区では商業を用途にすると容積率のボーナスをあげましょう、ブルーの地区では住宅を用途にすると容積率のボーナスをあげましょう、というものです。その結果、オレンジの地区にはビルのとっぺんまで商業というビルがとてたたくさんできました。先程、以前は1階がお店で2階が住まいだったという話をしましたが、銀座は小さなビルも多く、そういうビルにはお店の階上には小さなオフィスがたくさんありました。それが



全館商業になってしまったときに、今度は働くという要素が多少抜けたともいえるわけです。この地区計画のおかげで建替えは促進されて、商業の活性化に大いに役立ったといえるのですが、その反面、上層階では苦戦をされているお店もあると聞いています。

このように住むことと働くことが今後見直されてきますし、見直すことが街にとって必要ではないかと思っています。先程クリスティアンさんから路地空間をもっと見直すべきだというお話がありましたが、その中にそういう空間をどう位置づけていくかということが銀座にとってとても大事なのではないかと感じました。

現在かかっている地区計画も、商業用途のみを優先するという方針だけでよいのかどうか。一方でオフィス誘致に皆さん大変ご苦労されているということも重々承知しておりますし、そういう状況もあるのですが、やはり「住む、働く」という要素をバランスよくミックスさせる、そういうミックスした商業の街銀座ということを考え直すことが必要になってくるのではないかと私は考えています。

以上のように自転車という、非常に目に見える卑近な街の課題から銀座の将来像にかかわるいくつかの課題を考えてみました。

銀座デザイン協議会は中央区の要綱に基づいて、敷地面積 100㎡以上の建物と確認申請を必要とする工作物という条件の案件について協議する機関として、そもそもデザインルールもそのための参考であったり協議材料としてつくったものです。ですが、街の将来を見据えた課題を盛り込むことで、この小さな冊子が建物1つのデザインや広告に対するルールということだけではなく、銀座の都市デザインに対するルールを語り得る場にしていけたらいいのではないかというのが私の希望です。そういうものがこれから地区計画や区で作る法律、条例などとどう関わっていけるかというのが、今後の課題になってくるのかなと感じています。

小林 ありがとうございます。盛りだくさんのお話で、いま銀座でいろいろなことが起きているということをよく分かっていただけたと思います。これから議論に入りたいと思いますが、まず壇上にいる方々に今のお話を受けてどういうことをこれから考えていくかということをもとめていただきます。その後でご意見やこのルールの考え方に対するご批判をお受けしたり、オープンな議論ができればいいなと思います。ぜひ会場からも皆さんのご意見をうかがいながら議論が展開できればと思います。

一つテーマとして出てきましたのが、時代あるいは時間の流れの中でどうやって地域の文化を守るか、継承するか、つなげていくか、あるいはつくるか。時代の流れの中で守るべきもの、必ずしもハードだけでなくソフトなもの、文化のようなものもあるということです。それを銀座ではどういうふうにしてきたのか、していくのかということがあります。

もう一つは、特に通りの空間のような、いわゆるパブリックな公的な空間がありますが、銀座には



それぞれのお店の中に展開される私的な空間、プライベートな空間を銀座の通りに開けて提供しながら、私と公をまぜあわせながら空間を利用するということがあります。公的な空間でもみんなで私的に使うというような空間の公と私。そういう使い分けやうまく利用の仕方みたいなものが銀座にはあります。ヨーロッパの例に見る公的なスペースと銀座のいわゆる通り空間というのは同じなのか、違うのか、そういう議論があると思います。

もう一つは、私共でやっているように、みんなで話し合いをしながら物決めをする。そういう物決めの仕方。これは組織そのものと関連すると思いますが、それがトップダウンで決まってしまうのではなく、たとえばフォーラムという話がありましたが、市民が参加をしてフォーラムを繰り返しながら専門家がそれを手伝って物決めをしていく。そういう物決めの仕方やそれを支える組織、そういったことがもうひとつのテーマとしてあるかと思っています。

全体に共通する考え方として、通り空間、区や国が持っているパブリックな場所を通りとして銀座の方々がいろいろな形で利用します。それは必ずしも公的な使い方だけではなく、いろいろな使い方があると思いますが、そういう通り空間をどのように使ってきたか。これは銀座の非常に特徴的な文化の一つだと思いますし、通りの空間という切り口でまず話を進めたいと思います。

まず、クリスティアンさんにうかがいたいのですが、最初に見せていただいたようなヨーロッパの古いタイプのショッピング・モールは、窓のない大きなボックスの前に広場がありどーんと噴水があるわけですが、そういう空間ではない使い方がいまの潮流として出てきているということでした。それはヨーロッパ型のいわゆるパブリックなスペースの考え方が進化してきている、あるいは変わってきているのかと思います。銀座通りや他の通りには非常ににぎわいがありますが、そういう空間とどういうふうに似ていて、どういうふうに違うのか、あるいはどういうふうな仕組みで支えられているのか、少しお話しいただけますか。

ディマ ヨーロッパの都市マネジメントには公共と私的なもののあいだの線はそれほど強く感じられません。知らないとな部一体的な公的な空間と考えられます。たとえばデンマークのコペンハーゲン市では、市のレベルで道路空間から車を排除して人間のほうにスペースをさいています。そういうことは東京の道路空間でもやってほしいです。銀座の中央通りは何もできないかもしれませんが、裏の道はもう少し歩道を広くするとか、自転車のレーンを入れるとか、舗装や、もっと人間的な空間にしてほしいと思います。いまは交通のエンジニアや土木の人が公共空間を管理していて、もう少し一体的なマネジメントをして、地区の住民と一緒に公的な空間のマネジメントをすることが大事だと思います。

小林 交通や土木の人による管理という指摘がありましたが、人間のための空間をどう作るかという



ところでは、ヨーロッパでは、いまコペンハーゲンの例を挙げていただきましたが、進んでいるのではないかと。自転車も専用道路を作り、自転車のためのスペースも作る。そのことで人間のためのスペースも確保されるという事例がありました。銀座でも土木の方や交通の方もまじえて、中央通りから人のための空間をどうやってつくっていくかという勉強会も進んでいるのですが、しかし車を排除して人のための空間だけにするというのはなかなか難しい。こういうことは国を挙げて、都もまじえて話さなければいけないということもあります。

先程窪田さんから、ボトムアップの街づくりが銀座では進んでいるが、ニューヨークと違うのは都がからんでいないことだというお話がありました。道路あるいは交通という話では、大きな自治体からでないと話が進まないということがあります。銀座ではそういった公的な空間をこれからどうやって自治体もまじえて進めていったらよいのか、もしアドバイスがありましたら、またニューヨークの事例などもありましたらお話いただけますか。

窪田 直接なにか知見があるわけではないのですが、いま思っているのは、先程中島さんからボトムアップ型でこの第二版が書かれたというお話がありました。ニューヨークでもまったく同じで、トップダウンでやっていたときには気が付かなかったこと、たとえば昔の建物は窓の枠が木の枠なのです。木の枠の部分だけ新しくスチール製などにすると気密性があがるということでどんどん変わっていっていました。それにいち早く気が付くのは市民だったのです。住民がそういうことについても少し考えてほしい、ルールをつくってほしいということがあって、ボトムアップ型でできていくということがありました。それは取りも直さず、パブリックな空間とプライベートな空間といったときに、もちろん地面そのものがどうかということもありますが、その街路の風景がパブリックなものだという認識があり、そこはみんなが口を出してよいのだ、むしろ口を出すことでみんなでよいものに作っていくのだという考え方があるのだと感じています。

私は銀座の細かいところはわかっていませんが、外から見ていると、道路の問題という意味では非常にうまくいっていると思います。街路空間としては非常に魅力的だと思っています。むしろ、いわゆる公共の主体がもっているような場所は街路空間に限られるかもしれませんが、クリスティアンさんが先程紹介してくださったような大規模な再開発は、街路ではなく街区の中に公開空地を設けて人のにぎわいを取り入れようとするわけですが、そこをなにか非常に高度な、なんと言いますか、ざっとやっしまわらないで、街路に公共性を持たせて、そこを中をきっちりとうまい形で分離させているのではないかと思います。そういう街がだんだん減っていています。要するに大再開発があるとどんどん公開空地に引き込んでいきますので。そこが非常に面白い。銀座に来たときに明らかに「銀座に来たな」という感覚は街路に立ったときです。大きな都市計画での道路整備事業と、ボトムアップ型で協議を積み重ねていくということとの接点がまだもてていないという指摘ですが、それに対



してどうすればいいのかというのは、申し訳ありませんが私のほうからはありません。

小林 ありがとうございます。いま言っていたように、銀座は街路の風景が特徴的で、これはまさに公的な空間なのですが、一方それぞれのお店の私的な表情がかもし出されていて、それが銀座の通りの豊かな魅力につながっています。協議会の話し合いの中でも、そのことに対してはみなさん同意なさっていて、通りに対してどういう構えをすべきなのか、どういうふうに開いていけばいいのかが大きな議論になっていまして、公と私の境界の部分なのですが、そのところでどうやって関わっていくのかがとても大切な議論だと思います。

私たちもたくさんの事例を見てきましたが、竹沢さんはこの協議会ができる前から銀座にかかわっておられて、非常に多くの事例を見てこられていると思います。銀座の風景はいろいろな思いで作られてきていると思いますが、こういった努力を銀座の方々はなされてきたのか。そういったことを交えて、こういったことがいまの銀座の風景を作っているのではないかというお話をしていただければと思います。

竹沢 まず、明日「銀座ファッションウィーク、ランウェイ」というファッションショーが銀座通りで行われるという宣伝をしたいと思います。銀座通りを使ってデニムをテーマにしたファッションショーが行われます。そのように銀座通りを使うには、関係者の大変な努力があり、皆さんが何度も会合を重ねて、国道である銀座通りで国の支援も受けながら行います。そういうことはもっと銀座の街自体もやりたいと思っていて、秋のお祭りなどイベントの時も、路上を使ってもっといろいろなイベントができるのではないかとということで、街の中ではいろいろな提案をしているのです。

ただ、一番言いたいことは、行政の縦割りをやめてほしいということです。どこでも出る言葉だと思いますが、その壁が取れないと、いくらボトムアップをしてもなかなか打ち破れない。あちらに頭を下げ、こちらに頭を下げ、という状況がものすごく起きていると思います。先程、「東京都全体で」という話もありましたが、たとえば通り空間で言いますと、銀座通りは国道で、晴海通りと西銀座通り、昭和通りは都道で、その中の通りは区道です。そうするともし銀座が通り空間を一体で考えて活用していきたいとなると、全部のところにお話をして調整しなくてはならなくて大変です。それから道路を管理している警察さんなど、そういうところに全部関わってくることになります。

銀座の街ではいろいろ話をしながらイベントを実現させているのですが、ボトムアップをしていく時とトップダウンをしていく時の境目があり、そのところで物事が決まったり決まらなかったりする。しかもボトムアップをしていくと、上がすべて縦に割れている。そのような状況がものすごくあると感じています。こんなことを言っは申し訳ないのですが、区の中でも分かれているのです。部署が違くと、こちらのほうがよく知っていたりするくらい、情報が行き渡っていないこともたまにあ

ります。行政の側でも問題を共有していただかないと、使いたいと思ってもできなかつたりします。それから一体的なマネジメントをどうやるかという問題があります。この場所は誰の場所かということもあるかも知れませんが、それをみんなでマネジメントするという形をとれないとうまく使えないのではないかと考えています。

小林 銀座の街づくりの母体があり、それを区の方に見ていただいている。そして都道、国道というもっと大きい自治体の人たちとの付き合いの中でどうやって銀座の空間を銀座らしくつくっていくか、守っていくか、その難しさをお話いただきました。

一方で、この地区計画、銀座ルールは1996年に議論が始まって98年にできましたが、区は銀座と一緒に議論を重ねて、それをルール化していったという経緯もあります。他の区と比べても地域の人と膝を突き合わせて話をする、そういう文化をもっているのではないかと思います。それがいまの銀座のある部分を支えていると思います。

私自身の考え方なのですが、公的な空間と私的な空間、公と私の線をはっきり引いて、行政上土地の所有という意味で分けることはできるのですが、実は日本人は通りというのをみんなで両側町をつくりながら自分たちの空間として守りながら、そこをきれいに安全に使ってきたわけです。それが近代になって、どんどん自動車が入って道幅が広がって、道路がコミュニティーを分けるような存在になってしまったという、難しい問題を近代はかかえたと思います。でも銀座はいまでも通りの両側町という構成を守って、町内会の方々や商工会の方々がまとまって通りを中心にしてまとまろうという活動をずっとされています。これは日本の街の原型だと思いますが、それをいまでも守っているという強さを銀座をもっていると思います。そうだとすると、所有は国であったり区であったりする公共の場所でも、実は非常に「私（し）」の思いが入って、それを守っていくということです。蓑原さんの言葉だと思いますが、公と私のあいだに「共（きょう）」という、そういう共的な空間というとらえ方を、銀座の通りなどは特にできるのではないかと思います。そういう使い方、守り方、作り方を通りを中心にやっていくのが銀座的であり、日本的だと思っています。

銀座は昔ながらのコミュニティーがあります。江戸時代から400年の歴史があります。それが今でも息づいています。このように銀座の方々が話し合いができ、物決めができるというのは、そういう土地に根ざした村意識があるのではないかと思います。いわゆる市民という考え方と、広い意味での都民ということと、銀座の村、村と言ったら失礼かもしれませんが、小さいまとまりのあるコミュニティーといったもののとらえ方が違うのではないかと。つまり、銀座はある種のまとまり感を江戸時代以来引き継いでいるのではないかと気がします。

ほかの街づくりをいろいろ見ますと、大きな領域を抱えているところはそのまとまりを作ることが非常に難しいと思います。銀座は領域的にも昔の掘割で囲われ、いまは高速道路で囲われて、非常に



分かりやすい境界線をもっています。ここからは銀座、ここからは違うということがわかりやすいということも、一つの助けになっていると思いますが、そのコミュニティのまとまり感が、どちらかという前近代的なまとまり感に近いのではないかと思います。コミュニティのまとまりや意識とか、その辺でもしご指摘をいただければと思いますが、窪田さんいかがでしょうか。

窪田 前近代的なコミュニティというのは、私も非常に感じるわけですが、それは何かというと、共有ということです。私も蓑原先生の著作に相当影響されていると思いますが、コモンズというものが普通の街ではなくなっていて、それが銀座に来ると銀座という街に来たとわかるのは、そこに何らかの銀座のコモンズがあるということだと思います。それを共有しているということが、いま小林さんがおっしゃった前近代的なまとまり具合ということと私の中ではつながります。そういうコモンズをどうマネジメントしていくのかということは、人間の集落であるということから始まってきていると思います。

今日は少しユネスコの話などいたしました。もう一つ話題になっているのは文化的景観という言葉です。文化的景観というのは、たとえば棚田です。棚田は確かに見事で美しいですから、これを保存したいと文化財保護法というわけです。しかし保存したいといっても、そこで作業して棚田でお米を作る人がいなければ保存できないというのは明らかなことですから、これをひっくり返さなくてはいけません。つまりものを保存するのではなく、それをつくっているシステム全体をどうやって維持継承し、創造していくかということに注目は移っているわけです。それがまさに銀座で歴史的都市景観ということでは言わせていただいたのは、銀座はこれを守りましょうということではなく、法制度が必要であれば中央区が入り、民間の方が必要な時には民間が入ってくる。たとえば他の事例で、にぎわいがあるべきところにマンションがどんどん建っていくと、店のにぎわいが途切れてしまうのですが、それを地区計画で用途を制限しようとする、やはりそこでお店が成立しないのに店をやれというのは厳しいだろうとなってしまいます。けれども、そこを何とかお店になるように街のみんなで努力しようよというような取り組み方でないと、おそらくそのにぎわいはできないと思います。

銀座ルールが第二版を迎えて、作り方も含めて事例を重ねながらやっていくという取り組みは、前近代的なまとまりでしかできないことだと思います。そこで生まれてくる都市景観には持続性が非常に期待できると考えています。

小林 時代性というものもあると思います。つまり、21世紀に入って近代に対する反省があると思います。今までのよかったのだろうか。今の街づくりは、それまでにあったもののよさを見直したほうがよいのではないかという流れもあると思います。クリスティアンさんにはドイツの事例を挙げてもらいましたが、ヨーロッパでは今の街づくりの考え方は20世紀の考え方と違っているのでは



か。

ディマ ドイツでは、先程竹沢さんが言っていた縦割り行政を直すために、地域の行政がシティ・マネジメントという新しい事務局を市役所の中につくっています。その担当者がいろいろな縦割りの部門を調整しながら、街全体の発展を進めるということが数年前に始まりました。ボトムアップはよい言葉ですが、市民だけでは難しく、もう少し一体的な行政と市民のあいだの組織を作らなくてはなりません。

小林 シティ・マネジメントという横串でつなげるような部署が市役所の中にできていて、市民からの声などを拾って行政のルールに反映させるための母体としてとりまとめをするわけですね。それはそういう要請が市民から強くあったということでしょうか。

ディマ ドイツにも縦割り行政があり、そのために街の一体的な発展ができないという感じが強まり、ボトムアップとトップダウンが同時に行われるようにインテグレートされたのです。

小林 先程の竹沢さんのお話にあった、ボトムアップとトップダウンのあいだで物決めがされるみたいなところに、シティ・マネジメントのような部分が全体を横串にしてインテグレートする組織としてあるというのは、なるほどと思います。

中島さんは日本でたくさん街づくりを経験されていると思いますが、銀座を含めて、また今までのニューヨークやヨーロッパの話も含めて、日本の街づくりの現状、あるいは銀座の特徴を俯瞰していただいてご意見いただけますでしょうか。

中島 それだけで12回ぐらい授業をするような質問ではないかと思います（笑）。日本の場合、都市計画と街づくりが分離している状態があります。トップダウンとボトムアップが対立するかのような見方があります。もともと街づくりが生まれた経緯は、都市計画が、たとえばいきなり道路をガーと造ってしまうということに対抗して、市民の側から生まれたわけです。そのためボトムアップとトップダウンが分かれていて、街づくりをがんばっているところではボトムアップでいこう、でも行政の支援が全然ないというか、都市計画をうまく使っていないという状態だったのです。それが、銀座は10年くらい前から、銀座ルールというのは、地区計画という公的なしっかり守らないと建てられないというトップダウン的なものと、協議である種あいまいな銀座らしさをめぐるクリエイティブな、行政では絶対にできないものが融合していて、いちばん幸せなかたちでできている仕組みだと思います。

その後問われるのは、実際にできた空間や場所が本当によいものができているのかどうかで、竹沢さんが話されたようなこぼれ落ちてしまう問題が結構たくさんあるということです。仕組みとしては



銀座はとてもよくできていることになっていますが、その成果をしっかりと見ていると、銀座よりももっといい場所が実は日本にもあったり、もっと心地よい場所を作っているところもあるかなと思います。ざっぱく感想です。

小林 ありがとうございます。今のお話のように銀座の組織がどのようなまとまりをもって、その働きかけとしてボトムアップだけでなく、区と一緒に地区計画を作り、それが法制度となってトップダウンがあり、それが融合したかたちでいまの銀座の物決めのルールができてきたということです。

ここで、都市計画の専門家もいらっしゃいますし、街づくりの方もいらっしゃいますし、銀座ローカルの方もたくさんいらっしゃるので、こういった議論に参加していただいて、いろいろな方面から銀座ルールあるいは銀座の街づくりについてももう少し議論を進めたいと思います。どなたかご意見、ご質問がありましたら、お願いします。

質問者（浜野） 昨日、中国湖南省のチャンシャー（長沙）というところから一泊で帰ってきたところです。中国は仕事がいやでしばらくやめていたのですが、銀座があこがれのように思い出すというか、それでいま立ち上がって喋るのですが。中国では、みんな囲い込んだ六本木ヒルズ型の、街に裏を向けて中にぎわいをつくるばかりなのです。しかもキラキラで、相変わらずガラス張りで、アメリカの使い古しの建築事務所が稼いでいるわけです。あれはけしからんです。それをまた僕が反抗すると、おれはこんなに稼いできたんだと。いままでこんなに稼いできたのが、これから大失敗することをやっているのです。僕はブランドの仕事もしていますから、ブランドの側に立ちますと、銀座に入れたいですよ。銀座ではビル丸ごとやれるわけですから。あんなキンキラキンのガラス張りのところに誰もシャネルやグッチを入れたくないですよ。そういう意味で場所として素晴らしいし、非常に大事にされたいと思います。

前にも同じ質問をしたかもしれないですが、私は渋谷青山景観整備機構の専務理事をやっていて、うらやましいと思うのは銀座通りの防護柵がないということです。国道なのにどうして取れたのか。英国ではどんどん取って行って、取っていったほど事故がないということ、渋谷、青山で言っているのですが、付いてしまう。それに自転車ぐるぐるついてくるのです。いかがわしいといったらありません。銀座はどうして取れたのですか。

小林 銀座通りは国道であれだけ幅が広いのに、なぜガードレールが全然付いていないのか。この経緯をご存知の方はいらっしゃいますか。

竹沢 間違っていたら会場のどなたかにご指摘いただきたいのですが、今の銀座通りは昭和43年に



大きな整備がなされ、その時に路面電車をなくし、街路灯や柳も変えました。地下鉄出入口に屋根もつけない、そしてその時のコンセプトが基本的に余計なものは何も置かないということでガードレールもつかなかったのです。もちろん警察はガードレールを付けたいと考えているはずですが、ところが、銀座というのはそれは街で安全を守りますということを何度も申し上げ、イベントの時にもいろいろなお祭りの時にも事故を起こさないということを一生懸命言うことで、ガードレールを付けずに今まできていると聞いております。

小林 銀座通りに関しては車の出入口が1ヶ所もないのです。歩道を切って車を入れるということが1ヶ所もありません。これは本当に素晴らしいことです。人のためのストリートを作るという意志、それと交差点の部分で、ふつうであれば信号が付いていてよさそうな幅、14.5m × 14.5m のところに信号が付いていない。人が優先なのだということを守っているのです。それが銀座の文化です。

最初のほうの話で、大きなショッピング・モールの中にブランドなど入りたくないという気持ちはあると思います。銀座には一つ一つの路面店としてブランドのお店ができます。道に面して1軒1軒が建つという、つぶつぶがたくさん集まって街全体ができるという構造は銀座らしさを作っている要因だと思います。これがすべて大きな建物に取りかわって行って、大きい象だけになってしまったら銀座らしさがなくなると思います。小さいつぶつぶの集まりとしての街も、銀座らしい特徴だと思います。

他に何かありますでしょうか。

質問者 青山の通りのことをやっていらっしゃる方とあれなんです、銀座通りと青山の通り、表参道の通りの違いはどういうことでしょうか。端的に言って、これは銀座の方はなにもおっしゃらないけど、それは当たり前なこと、これは京都でもどこでもそうですが、商店の前はきれいに掃除するということです。ちゃんと塩も打って、お清めをするのです。そのくらい商売というのは神々しいところなのです。それを青山、表参道、私も表参道の通り会に何年か入っていたことがあります、銀座から見てあんなに汚いところはありません。それで、銀座がどうのこうのと言われることが、反対に僕に言わせるとおこがましいです。

清掃の話をしたんですが、自転車問題もあります、なんで自転車を置くか。そこが汚いから置くのです。きれいだったら置きません。和光のウインドーの前に自転車を置きますか。今まで私が知っている限り、銀座の皆さんは総出でみんな靴を脱いで裸足で道路をタワシで磨くのです。それが銀座のいちばんのボトムアップだと思うのです。どの街でも、京都でも金沢でも、商店がちゃんと繁盛しているところはどこもやっています。銀座がこれまで繁盛してきたもとは清潔だということです。皆さんが歩いて汚い街だったら歩く気になりません。以上です。



小林 すべてをまとめていただいたようなお言葉でした。今日のシンポジウムでは、銀座は人のための街、人が作る街、必ず人が主役だということは幾度も確認されたと思います。今のお話のようにきれいに掃除をするということも、一人ひとりが責任をもってされています。安全もそれで守られている。銀座は本当に人が作る街で人のための街だということを改めて確認されたと思います。

時間が迫ってきましたので、ご登壇の先生方に一言ずつお話しいただければと思います。

窪田 街づくりは掃除からということをいま教えていただいて、そういうことが銀座の根底にあるのだということがよくわかりました。いろいろな街が東京にはあって、ニューヨークを見ていると、いろいろな界隈に名前が付いています。グリニッジ・ビレッジ、ソーホー、アッパーウエストタウン。私は東京生まれの東京育ちなので東京にはたいへん愛着がありまして、東京を本当に魅力的な都市にしていけないかなと思っています。銀座には銀座のやり方があって、そのことをぜひ他の街の方々にも教えていただきたいですし、また渋谷なら渋谷の街、いま私はいわゆる駅周辺の大再開発の話に関わらせていただいておりますが、あれはやはり事業者さん、地域の方、区の方、都の方、そういうまた違う方法で街づくりをやっています。そういういろいろな街づくりの方法が切磋琢磨しあいながら情報交換して、東京という一つの、それぞれの「共」という界隈の世界をもう少し広い意味での「共」にしていけたらすばらしいと感じています。

ディマ まとめるのは難しいですね。銀座のガイドラインに関して話しますと、今はガイドラインなのでビルの開発を一つ一つ協議して、ビジョンや戦略はガイドラインの中に入っていません。ガイドラインをもっと強化したいのなら、そのなかにビジョンや未来の銀座像を入れたらもっとよくなるのではないかと思います。

竹沢 私たちはどうしても銀座の中だけでものを考えがちなのです。銀座は本当によい街ですし、私も大好きですし、ですけど銀座の中ですべての用事は足りてしまうので、なかなか他の街に行かなくなってしまう状況が、私自身あります。銀座デザイン協議会もある程度の実績を重ねた今だからこそもう少し世界の街、もう少し学びたいという気持ちがあります。そのために、今日もこのようなシンポジウムに皆さんにもいらしていただいたのかなと思っています。最初からよその街のことを勉強ばかりしようとしたわけではなく、いまここまでデザインルールも第二版ができたからこそ、私はもう少し世界の街のことや、日本の街でも銀座だけでなくこんなに頑張っている街があるのだということも、もう少し勉強していけたらいいのかなと今日は感じました。クリスティアンさんがおっしゃったように、銀座の将来像を考えると共に、そこを戦略的に作っていく時期なのだという事



考えていますし、今日はそこが大事なのだということを改めて感じました。

小林 銀座の皆様方が長い間かけて、こういう話し合いの場をつくられたということは非常に敬意を表することです。話し合いなくして銀座の街づくりはありません。その仕組みを長い時間をかけてきちんと作ってこられて、その上に街づくりがあるということを今日改めて確認させていただきました。

一方で、世界で一体何が起きているのか、そのなかで私たちがやっていることはどういう意味をもっているのか、どういう位置づけなのかということを確認できたように思います。これは決して今日で終わることではなく、これから銀座でやっていることをいろいろなところで発信して、皆様方に世界の皆さんに見てもらってご批判をいただいた上で、また揉んでいくということができると、また違う発展があるのかなと思います。ですので、少しアグレッシブではありますが、どんどん発展していく銀座の街づくりになればいいかなと思っています。

今日は本当にお足元の悪い中、こんなにたくさんの方に来ていただきまして、最後までお付き合いいただきましてありがとうございます。壇上の先生方、蓑原さんや中島さんや皆様方のご協力があって、この街づくりができています。まず銀座に住んでおられる銀座の方々がこの街づくりを率先して引っ張っていただいているということを、今日確認させていただいて、次の時代にもっとよい銀座を作っていけるよう尽力したいと思います。今日はどうもありがとうございました。

■ デイマ・クリスティアン ■



スライド 001



スライド 002



スライド 003



スライド 004



スライド 005



スライド 006



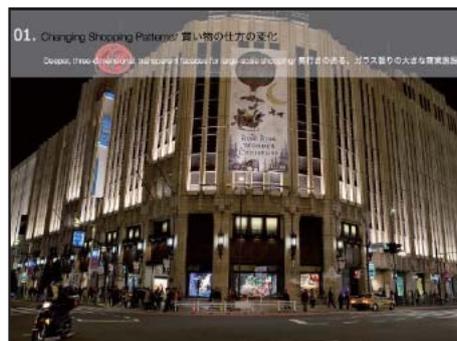
スライド 007



スライド 008



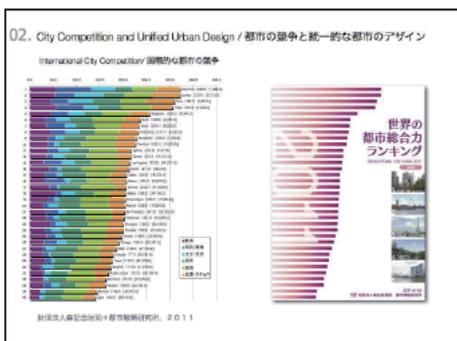
スライド 009



スライド 010



スライド 011



スライド 012



スライド 013



スライド 014

窪田 亜矢

世界の潮流からみた「銀座のルール」

2012.3.23 銀座デザインルール第二版記念
 東京大学都市デザイン研究室
 窪田亜矢

スライド 001

歴史的都市景観の実現へ Towards Historic Urban Landscape

世界の潮流からみた「銀座のルール」

2012.3.23 銀座デザインルール第二版記念
 東京大学都市デザイン研究室
 窪田亜矢

スライド 002

1970年代の動き：歴史的環境と都市の呼応

日本：文化庁

- 1975 「伝統的建造物群保存地区」制度

世界：ユネスコ

- 1976 「歴史的地区の保全および現代的役割に関する勧告」
- Integrated Conservation
- 都市計画的な手法も含む統合的な保全施策

スライド 003

1990年代の動き：文化的景観という価値

日本：文化庁

- Authenticity オーセンティシティ=真正性は、凍結的保存だけではない。伊勢神宮

世界：ユネスコ

- 文化の多様性
- 物の背景にあるシステム
- Cultural Landscape：人類と自然の関係

スライド 004

2000年代の動き：歴史的都市景観の論議

日本：国土交通省など

- 2004 景観法、2008 歴史まちづくり法

世界：ユネスコ

- 人間/コミュニティの活動があることが大切。
- 高層タワーに象徴される現代建築物と歴史的環境に調和はあり得るのか？
- 2011 Historic Urban Landscape

スライド 005



スライド 006



スライド 007



スライド 008



スライド 009



スライド 010



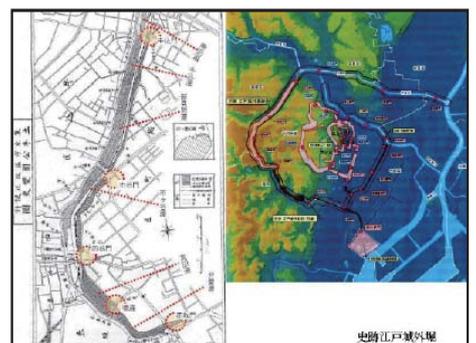
スライド 011



スライド 012



スライド 013



スライド 014



スライド 005



スライド 016



スライド 017



スライド 018



■ 竹沢 えり子 ■

銀座のデザインルールと街の将来

銀座街づくり会議
竹沢えり子
2012.3.23

スライド 001



銀座地区地区計画

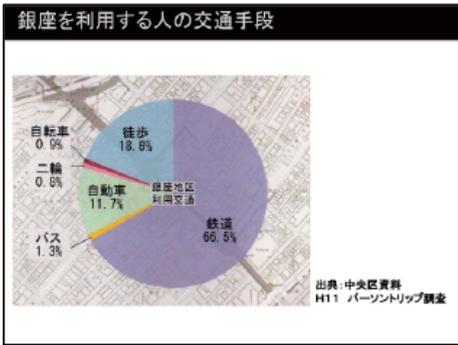
■ 高度利用地区及び地区計画の区域
■ 用途別保護地区及び用途制限の区域

スライド 004

道路空間 (歩道空間)

銀座地区全体の4割近くが道路空間
→ 区域面積: 約88ha
→ 道路面積: 約32ha
→ 道路率: 約37%

スライド 005



銀座のデザインルールと街の将来

スライド 008